異世界転移したよ！

Transferred to a different world

八田若忠
Yatsuta Wakatada

3

人物紹介
CHARACTER
アーノルド
エンガル第二十五騎士団団長。
強面だけど子供にモテモテ。
勇者あああ
オビフィロ帝国からやってきた、
魔王討伐を志す若者。
聖女リンダ
アグネス神殿の聖女様。
他人の心を操る邪眼の持ち主。
アサカー
エンガルの町で鍛冶屋を営む
ドワーフ。器の広い親父様。
ルッソ
イント一家の自家用“馬”。
エンガルの子供たちの人気者。
エステア
アサカーの三女。筋肉系ファイター。
なにげに過激発言が多い。
デックス
アサカーの長女。武器はナイフ系。
クールだけどダメ男製造機。
ヴィータ
アサカーの次女。罠のエキスパート。
天使の微笑を浮かべる悪魔。
イント
中二病ぎみの45歳・大道寺凱(だいどうじがい)が
転生した本編主人公。新婚生活も
尻に引かれる日々。

1　合コン！　甲冑（かっちゅう）！　総務部長！

「それじゃ合コンの打ち合わせに行ってきますね」
「はいはーい、いってらっしゃい～」
部屋の奥で、思い思いにくつろいでいる俺の三人の奥様達が気のない返事をよこしてくる。
ドアノブに手をかけようとした瞬間。俺の頬を掠（かす）めて一本のククリナイフがドアに突き刺さった。
「行ってきますねじゃないわよ、イント！　自分の女房（にょうぼう）を目の前にして、合コンの打ち合わせとは良い度胸してるじゃないの」
俺の発言をボケと受け取ったのか、まさに殺す気でノリツッコミをして来たのは、剣と魔法の世界でも隅っこの方に位置する小さな町エンガルの、ドワーフ族が営む「アサカー鍛冶屋」のアサカー家長女デックス。
黒髪ストレートの双剣使いで、クールかつキツ目だけどダメ男製造機である。
「ダンナ、その合コン会場を更地（さらち）に変えて来るから場所を教えろよ」

デックスの背後で、カチャカチャと物騒なギミック付きの手甲を装着し始めたのは三女エステア。
赤髪ショートで殴るの大好き、男勝りで脳ミソ筋肉だけどエロ発言が一番多い。
「合コン相手が全員行方不明になれば中止になるわよね～？」
丸鋸のような回転ギミック付きの物騒な盾を装着し始めたのは次女ヴィータ。
金髪ゆるふわロングヘアーの防御や体術の達人で、目立たないけどかなり腹黒い。いじめっ子の幼馴染みが数人行方不明になっている事には触れてはいけないらしい。
地球の神様からリストラされた俺と、エンガルの町で有名な「嫁き遅れ三姉妹」。その三姉妹の父親に拾われた俺は、アサカー家に居候する事になり、結婚をゴリ押しされるまでは良かったのですが……奥様達の見た目が小学生だったのです。
「騎士団の合コンのセッティングですよ、前に話したじゃないすか。今日はその打ち合わせなんですよ」
「ああ、なんか言ってたわね、そういえば」
説明すると、奥様達がようやく武装解除をしてくれた。
「今回はお酒も入る予定なので、孫の湯ではできないんすよ」
「どこでやるのよ？」
「俺の行きつけのうどん屋で」
「色気のないとこでやるのねえ？　女の子ががっかりするわよ？」

「やっぱりそうですかね？　女の子の集まりが悪くて困ってるんですよ」
「孫の湯で釣って、うどん屋で飲み会してみたら～？」
なるほど……二次会で飲めばいいのか。
「模擬戦の時のワックちゃんみたくエステ券で釣りますか」
「混浴でも水着でなら、それほど恥ずかしくないだろ？」
模擬戦以来、水着の注文が増えているらしい。みんな最初は嫌がってたのにね。
「じゃあ、プールは難しいので、ジャグジー方式で顔合わせなんかいいかもしれませんね」
「ジャグジーって何？」
「そうですね、混浴風呂とプールの中間みたいなもので、水流を付けたり泡を出したりするやつですね。結構楽しいですよ」
奥様達が結構食い付いてきた。
「これはいけるかもしれませんね、エリーさんに相談してみます」

その後、孫の湯リゾート会議にて、ジャグジー設置の承認を得る為に、現物を作成して孫の湯の責任者であるエリーさんに試してみてもらう。
「物は試しだ、まずかったら改良するし、終わったらその日のうちに埋める事も可能なんだろ？酒の提供以外は好きにやって構わないよ、土地は余ってるんだし」

色よい答えが返ってきたので、合コン参加者六十人が好き勝手に遊べるだけのジャグジーを作り、ついでに交流スペースも作成した。
先日の、子どもを狙った盗賊団襲撃からの防衛のお礼として、エステの無料券も大判振る舞いだ。リピーターも見込んでいるのだろう。
食事は、技術指導を受けた子供達の練習台という名目で、格安で引き受けてくれた。
孫の湯様様です。
孫の湯サイドの調整は完璧で、女の子を集めるのは、合コン参加資格とエステ券三枚でギルドの嫁き遅れ受付嬢ナナさんにお願いした。

「という訳で、あとはマスターのとこだけなんすよ。どうか一つ、エンガルの町の活性化に貢献してもらえませんか？」
俺は行きつけのうどん屋のマスターに、合コン会場提供のお願いに来ていた。
「別に構わないんだよ、合コン会場にするのはよ」
「じゃあ、何が気に食わないんすか？」
「もう何十回も言っているんだが、うちはうどん屋じゃねえ」
「じゃあ、俺はどこでうどんを食えばいいんすか？」
「うどん屋で食えっつってんだろ」

「わかりました、じゃあ合コンの二次会の会場をお願いしますね」
「おう、任せておけ」
「とびきりのうどんを楽しみにしてます」
「任せておけ」
こうして会場の準備が終わり、残る問題はあと一つだけである。

◇◇◇

――エンガル第二十五騎士団合コン特別対策本部。
仰々しい看板が置かれた騎士団駐屯所の会議室の一室で、今回の催しの対策会議が行われていた。
「えー、まずですね、前回カップルが乱立した背景を、分析した結果を報告しますね」
そんな俺の言葉に、騎士団合コン選抜メンバーが、真剣な表情でメモを取る。
「まずは騎士団との模擬戦と言う事で、ハンターの女の子達は非常に不安な気持ちになっていたそうです。そして騎士の皆さんとの出会いのシーンでは、皆さんが捕虜として彼女達と出会う事により、全員お姫様扱いされる事になりました」
「騎士が捕虜になる事は、恥ずべき事態ではないのか？」
「今大事なのは女の子の心理ですね。女の子は皆、お姫様になりたいものなのですよ」

「おお……」
騎士団からどよめきが上がる。いつの間にか会議室の外にも、鈴生りの人集りができていた。
「そして捕虜の方々にやっていただいた事ですが、お風呂の中、半裸の状態で逞しさをアピールしながら、水着の女の子をおぶって丘の上まで走ってもらいました」
「なんと……」
またざわざわとざわめく。
「以上の状況から導き出される、キーワードは？　はい、アルファさん」
指名された工兵科所属のアルファさんは、起立して大声で答える。
「恐怖、隷属、筋肉、オッパイです！」
「まったく違いますね」
「な、なんだと……？」
会議室周辺がさらにどよめく。
「ここでのモテポイントは紳士的、清潔感、頼り甲斐、解放感です」
「し、しかし筋肉で、女の子を片手で持ち上げれば……」
「年頃の女の子を孫の湯の子供達と一緒にしてはいけません」
「そ、そうなのか……」
「そして前回の騎士団結婚バブルの裏側には、心理的に重要なトラップが仕組まれてます」

「な、なんだってえ？」
「騎士団の捕虜が、モテざるを得ない状況に追い込む、重要なキーワード。それは」
「それは？」
「吊り橋効果です」
ざわざわとざわめく会議室は、もう既に入り口のドアと窓が取り外され、黒山の人集りである。
「吊り橋効果とは、吊り橋を渡る時のような不安感を女の子に与える事でドキドキさせて、そのドキドキを近くにいる異性に対する恋愛のドキドキと勘違いさせてしまう。恋のキューピッドが使用するブービートラップです」
「な、なんて恐ろしい」
「止めますか？」
「いえ、ぜひお願い致します」
会議室周辺では、全員がメモを取り始める。
「せ、先生、水着の女性を目にするのは初めてなのですが、注意点はありますか？」
「水着とは……オッパイが大きい事にコンプレックスを持つ女の子のオッパイはより大きく見え、小さい事にコンプレックスを持つ女の子のオッパイはより小さく見えるという、魔法付与された特殊装甲です」
「おおう！」

前半で八割の歓声が、後半で二割の歓声が上がる。
「水着は、胸部装甲が薄くなる事により防御が手薄になる反面、フットワークと攻めが激しくなります。戦場で鎧を剥がされた兵士のような物です」
「それが解放感なのですね？」
「はい。しかし胸部装甲が薄いからといって、攻めに走りすぎ、そこばかり見ていると勘付かれます。特に装甲が薄い分、気配の察知は敏感なので、逃げられ易くなります」
「なるほど、斥候は控えないといけない訳ですな」
「先生！　臀部装甲も薄いのですが、背後からの斥候は積極的に行っても良いのでしょうか？」
「比較的気づかれ難いですが、周りには同性の同盟者がいるので、情報伝達が容易に為されるはずです。控えた方がよろしいでしょう」
その日の会議は実戦前日さながらに、深夜まで白熱した。

◇◇◇

そして迎えた合コン当日。孫の湯受付で、俺は騎士団の合コン検閲官をしていた。
なぜ検閲かというと、騎士団員の常識が余りにも酷いため、服装のチェックを行うはめになったからだ。

町内会のつてを頼り、洋服のサカエ屋のご主人に出張屋台を展開してもらっている。
「合コン参加者です、チケットの確認をお願いいたします」
一人のイケメン騎士団員が到着した。
光り輝くシルバーの甲冑に、騎士団の中でもなかなか見られないほど巨大な大剣を背中に背負って、白い馬に跨った騎士だ。
「だからなんで合コンに甲冑を着こむんだよ！　仕事じゃないんだから、普段着で来いよ！」
「はっはっは、これは仕事用の甲冑ではなく、お出かけ用の甲冑ですよ。ほら、脇のところに通気性を良くする為のスリットがあるでしょう？　あと、肩の部分にはオシャレな彫刻があしらってあります。しかも……かの有名な甲冑職人のメーカー品ですぞ、ここに『アデドス』と彫り込んであるのを見てください？」
「サカエ屋のご主人さん、お願いします……」
「おうよ！」
甲冑男は馬から引きずり降ろされ、フィッティングテントに押し込められる。
「な、何を……某は、姫を、姫を……」
どうやら、女の子を姫扱いするという部分を聞きかじり、こじらせた結果こうなったらしい。
「合コン参加者です」
次の参加者が来た、と、慌ててテントから出て受付に行く。そこには、身体全体に藁を巻き、顔

には真っ赤に塗られた木製のお面、頭には金色に輝く巨大なツノを生やした異形の生き物が、合コンチケットを握りしめ佇んでいた。
「えーと……」
「はい」
「なぜ？」
「まず女の子には、不安と恐怖を与えるのが良いと聞きまして」
「お前はナマハゲか！　サカエ屋さあああん！」
「任せとけ」
そんなこんなで、俺の仕事は騎士団のボケ潰しから始まった。しかもコイツラ素でボケて来るから、我が家のボケまくりゴーレムのハルコよりタチが悪い。
女の子達はエステ無料券でホクホク顔で、エステスタッフも朝から大わらわで施術を行っている。
水着が飛ぶように売れて、サカエ屋さんも嬉しそうである。
合コンは、女の子達のエステが終わった昼頃、ランチ会から始まった。
「えーと……」
「うむ」
水着姿の参加者が一堂に会した特設ルームの中央には、想定外の人物が鎮座していた。
「騎士団長さんがなぜ？」

「参加予定者の一人が今回怪我で欠席でな。急遽代理で私が来たが、何か不服はあるか？」
黒くてゴツい革の眼帯で右目を覆い、鋭い眼光を放つ左目でこちらを見やる団長。アルファさんに視線を送ると、
「全身打撲の怪我を負い、ぜひ団長殿に代理を……と」
アルファさんは視線を逸らしながら、棒読みで理由を話してくれた。
「なんとなく理由はわかりましたが……」
俺は呆れながら、合コン会場で浮きまくってるもう一人の人物に目をやる。
「あたしだって独身なんだよ！　いいじゃないか」
「エリーさんもお年頃ですからね」
彼女の隣に座るナナさんに視線を送ると、ニヤリと笑いながら、エステ券十枚ほどの束を胸元から引き出した。どうやらエリーさんに買収されたようだ。
「本日はお日柄も良く、日頃の疲れを癒やす、いい機会だと思って存分に楽しんでください。また騎士団の精鋭達は、女の子に親しむ機会がなく、非常にぎこちないとは思いますが、そこは女の子達が上手にフォローしてあげてくださいね」
カチコチに緊張した騎士団と、くすくすと笑っているハンターの女の子達。
雰囲気も良くなってきたところで、
「はいそれでは、見合って見合って、はっけよい残った」

俺の号令の下、ジュースで乾杯をした。
合コンは和やかに進み、ガチガチに緊張していた騎士団の面々も、柔らかな笑みを見せる事ができるようになってきた頃、事件は唐突に起こった。
「エリーさんはいるかい？　大変だ」
近所の農家のおじさんが、孫の湯の受付に飛び込んで来たので、エリーさんが対応する。
「野火だ、野火が出た。来店しているお客さんで男手がいたら、貸して欲しい」
野火って言うと……野原の火事？　状況が呑み込めずに俺が呆けていると、今の今まで水着姿の女の子相手にデレデレしていた騎士団三十人の目付きが一斉に変わり、騎士団長の指示の下で水着姿で飛び出して行った。
「イントくん！　ぼーっとしてるんじゃない！　ゴーレムを出して」
「は、はい！」
団長の声につられて表に飛び出してみると、風に煽られた火の手が、みるみるこちらに迫って来る。
「イントくん、火の手前の土を起こせるか？　燃え種を除去したい」
団長の指示が飛ぶ。
「了解しました、水桶の作成は必要ですか？」
「頼む！　全員バケツリレーの準備！」

テキパキと騎士団が動き出し、近くのジャグジーまで走り出す。
孫の湯にいた女の子達と子供達は、エリーさんの指示により避難済みらしい。ザバザバと水しぶきを上げ、騎士団がジャグジーから水を汲み出すと、凄い勢いで走り出した。
俺は火の手が迫る野原でゴーレムを作成し燃え種を剥がし、そのまま別のゴーレムを作成して火の海を転がり回らせる。
次々と作成されるゴーレムと、多数のバケツ。
「バケツはもういい、火に土を被せる事はできるか？」
団長の指示に従って、アースボールを火に向けて放り投げる。
「火勢が衰えてきている！　残火処理開始」
「応！」
騎士団全員泥まみれになりながらバケツリレーを続け、きっちりと野火が消えたのは、とっぷりと日が暮れた後だった。
「皆さんお疲れ様でした」
「イントくんもお疲れ様だな。ゴーレムがいなかったら、もっと広がっていただろう」
途中から騎士団の応援も駆けつけて、町中の私設消防団も交ざって、人海戦術で火の粉を消した。
「あとは勤務中の騎士団の皆さんに任せて、皆でお風呂に入りませんか？」
「そうだな。今日の合コンとやらは運がなかったが、こればかりはしょうがない」

「あ……合コンしてたんだった……」
合コンメンバーが一様に膝から崩れ落ちる。
「孫の湯があれば、いつでもできますよ！　またセッティングしますんで、汚れた顔を洗いましょう！」
全員でヤケ気味に風呂に入り、涙を流しながら団歌を歌った。
帰り支度を始める全員に向かって、エリーさんが問いかける。
「イントくん達、腹減ってないのかい？」
「もうお腹が減りすぎて目を回しそうですよ……」
「うどんが伸びない内に、二次会の会場行かないと。マスターが怒ってるんじゃないのかい？」
あ……忘れてた。
「みなさん！　これからうどんを食べませんか？　酒もありますよ！」
その俺の言葉に、全員がノリノリでうどん屋に繰り出す。
とりあえず合コンは流れたが、町を守ったという自負が、騎士団を支えていた。
うどん屋のドアを開けると、無愛想なマスターが迎えてくれ、迷惑そうに呟いた。
「お前らが遅いから、みんな心配してるじゃねえか、さっさと座れ。出汁が煮詰まっちまう」
貸し切りのうどん屋のテーブル席には、きっちりと女の子達が座って待っていた。
それを見た騎士団三十人は揃って大泣きしながら、うどんを注文したのだった。

「だからうどん屋じゃねぇって……」
マスターの声は、うどんを啜る音にかき消されていった。

◇◇◇

最近アサカー家では、朝のラジオ体操がブームになっている。
早朝から家族揃って、体操ゴーレムの笛に合わせてラジオ体操をする様は、どう見ても異世界転移してきた風景に見えない。しかし、誰から広まったのか「肩こり腰痛肌荒れニキビ夜泣きにも効く」夢の体操として、町の人にも受け入れられて、ハルコまでやりだす始末だ。
「美容は女の生命線デス、嫁き遅れの呪いは怖いデス」
どこから仕入れて来た情報なのかは知らないが、ずいぶん恐れているようだ。
体操が終わった頃にデックスさんが話しかけてきた。
「イントは今日、仕事の予定はあるの？」
「一応ギルドに顔を出して、軽く仕事をして来ようかと思ってますが？」
「また採取系？」
「採取が好きなんすよ」
「あんまり新人ハンターの仕事を取っちゃだめよ？　一応Bランクなんだから」

「はっはっは、僕の採取量は新人ハンターの足元にも及びませんよ」
「良いのか悪いのか、わからない返答ね……」
「Bランクの討伐義務も、この前バロルダンジョンの問題を解決したおかげで、エンガルではなくなりそうですしね。ありがたい事です」
「そんな訳ないじゃない、近所の討伐義務がなくなったせいで、遠征討伐に行かなきゃいけないのよ？」
「遠征ですか？　また嫌な響きですね？」
「まあそのうち詳しく説明するわ。バロルダンジョンの討伐義務を果たしたばかりだから、しばらくの間はギルドも無理を言ってこないでしょ」
「ギルド長がまた、余計な仕事を押し付けて来そうですけどね」
「介護だと思って相手をしてあげなさいよ」
老人の無理難題は始末に負えないから、できるだけ近づかないようにしよう。
「じゃあ、行ってきますね」
「いってらっしゃいデス、今晩はゴチソウデス、誕生日なので早く帰ってきてクダサイ、パインサラダを用意しておくデス」
「誰も誕生日じゃないよ！　変なフラグを山ほど立てるな」
ハルコが出掛けに余計なフラグを立てるのだった。

◇◇◇

いつも通りギルドの建物に入ると、いつも通り空いているナナさんのカウンターを目指す。
ナナさんのカウンターの上には、『総務部長』のプレートが光っていた。
それを見た俺は迷わず一番端っこにいる新人受付嬢のところに行き、ヒソヒソ声で薬草採取の依頼を受け、気配を消しながらギルドを出た。
新人受付嬢の話によると、どうやら合コンでまた失敗したらしい。しかし同僚達は成功し、結果、ナナさんは総務部長の座を手に入れたようだ。
合コンといえば、先の騎士団合コンでカップルが続出したとのこと。中でもセンセーショナルだったのは、騎士団長とエリーさんの電撃結婚だった。
騎士団長は騎士団を辞め、孫の湯の専属用心棒兼、掃除夫兼、便所の妖精としてその手腕を遺憾なく発揮しているらしい。
俺はといえば、地元青年団に合コンの神と噂され、毎日のように合コンの企画申し込みがアサカー鍛冶屋に持ち込まれていた。ノウハウを教えた事により、最近は自分達で主催しているようだが。
足元の亀のベスパに乗り、貸馬屋まで行くと、馬のルッソくんが馬屋の外で待ち構えていた。

「タフィーロさん、いつもすみませんね」
ルッソくんにワックスをかけていた貸馬屋のタフィーロさんに挨拶をする。
「おお、同志か」
ワックスの拭き上げを終わらし、こちらに向き直ったタフィーロさん。
「ルッソを店の前に出して、ワックスをかけるだけで、店の格が上がるのだよ、それほどの馬だ。だから気にするな」
ベスパと一緒にルッソくんの背中に跨がり、行き先を告げる。
「ロクゴウ山の麓までお願いしますね、ルッソくん」
「きゅー」
いつもならドッコドッコと、賑やかな音を立てて走り出すルッソくんが、するりと音もなく動き出す。
今のルッソくんは、まるでハイブリッドカーのようだ。
「ほう……」
タフィーロさんも目を剥いて驚いている。
「どこで覚えて来たんです？」
「きゅー」
内緒らしい。

いつもより風の音が心地よく、気のせいか土埃も抑えられている。
「ルッソくん、素晴らしいですね」
気を良くしたルッソくんと、一生懸命足運びを観察しているベスパ。
いつも通りの日常と、ほんわかとした緩い空気に、ハルコのフラグ建築など記憶から抜け落ちていた。
この時までは……。

2　イヌ男！　猫耳！　お姫さま！

ロクゴウ山の麓では、年がら年中薬草が取れるので、新人ハンターがちらほらと見受けられる。薬草を摘みに入る前に、麓にぶら下がっている、人の頭ほどの大きさの鐘を「カーン」と鳴らすのがマナーだ。

鐘を鳴らすのは、野生動物を近づけない為である。

鐘の音を聞いてこちらを振り返ったハンターの中で、数人が頭を下げてくる。おそらくは模擬戦がきっかけで結婚した新婚ハンターだろう。

俺はルッソくんと一緒に、新人ハンターの邪魔をしないように、薬草ゾーンの奥地へと進む。

身長一メートルほどのゴーレムを三体作成して、薬草採取をお願いすると、早速お昼寝タイムである。

ルッソくんは周辺警戒と散歩、亀のベスパはルッソくんの後を付いて回っていたが、しばらくすると飽きたようで俺のところにやって来てサラミをせがむ。

ベスパの大好きなランニングキャッチだ。

俺が放り投げたサラミを、ベスパは次々とランニングキャッチして行く。

「次はちょっと遠いですよ」

少し力を込めてサラミを放り投げると、ベスパは短い脚を懸命に動かし、サラミを追いかける。

「ちぇすとお！」

突如茂みの中から大きな黒い影が飛び出して、ベスパが追いかけていたサラミを横から掠め取った。

沈黙が流れて、その黒い影は茂みの中に戻って行く。

「ベスパ、次です」

今度は比較的近くにサラミを放り投げた。

「きぇあああ！」

鋭い猿声を上げながら、俺の足元に転がりこんでサラミを咥えたのは、筋骨隆々とした逞しい身体つきの男だった。

上半身裸で下半身はパツパツの半ズボン。肌の色は浅黒く、ギラギラと目付きは鋭く光り、野生の獣のような印象だ。

よく見ると犬の耳が付いている。

「あの……」

「こォォォ」

空手の息吹を牽制代わりに、視線を逸らさずに後ろ歩きで藪の中に戻っていく男。
気を取りなおして、再びサラミを構える俺。
「べ……」
「ちぇりゃああ！」
さすがのベスパもドン引きだ。
これは……関わってはいけない類の人ですね。
「ルッソくん……帰りますよ」
小声でルッソくんを呼び寄せ、ゴーレム達を回収すると、急いでルッソくんに跨った。
「あいや！　待たれい！」
「ひいいいい！」
呼び止められたので脇目も振らずに走り出す。
「ちぇりゃあああああ！」
攻撃か？　やばい！　今後ろから攻撃されたら死ぬる！
後ろを振り返って追っ手を確認したら、足を抱えて蹲っていた。
おそるおそる近寄って声を掛けてみる。
「あ、あのー、大丈夫ですか？」
「トゲが……」

「トゲかよ！　無理して裸足で歩くなよ！」
ワイルドな身なりのくせに、足にトゲを刺して蹲る犬獣人は、痛みを誤魔化す為に必死で息を吹きかける。
「うむ、大丈夫だ。一ヶ月もあれば完治するだろう」
「完治まで長すぎだよ！」
思わず突っ込みを入れてしまって、後悔した。
このパターンはいつの間にかズルズルと縁ができて、家に帰ってから奥様達にコッテリ怒られるパターンだ。
ゴーレムのクマ兄さんを作成して、トゲを抜いてあげようとすると、
「な、なんだその大男は？　トゲを抜くのか？　いや……抜かなくていい、いや本当に、あ……ああ」
トゲを抜いた直後に妙にテンションが下がる犬男。
「これで大丈夫ですので、あとはお互い何もなかったという感じで……」
それじゃあ、と手を振り別れを告げた途端。
「拙者の名前はマツオと申します。この御恩は一生涯忘れぬゆえ……」
「早急に忘れてください」
「然り然り、この御恩を返す為、拙者は主殿の従者になりとう御座います」

「話を聞いてください」
「認めてもらえなくば、拙者腹を切って詫びるしかないでゴザル」
「話し方もキツイんで、ホント勘弁してください」
「それは重畳」
「ケンカ売ってるのか？」
もう何を言っても通じないので、ルッソくんに跨りベスパを回収すると、力の限り遠くへサラミを放り投げた。
「これはお家の一大事！」
犬男はサラミに釣られ全速力で走りだす。
俺達は逆方向に全速力で走りだした。

◇◇◇

「で？」
デックスが下からこちらを見下ろした。
「なんか……付いて来ちゃってですね」
「これで何度目？　いい加減、外で動物拾って来るのは懲りなさいよ」

「動物って奥方様」
「あんたは黙ってなさい」
マツオくんが尻尾を足の間に丸める。
エステアがニヤニヤ笑いながら、マツオくんに話しかける。
「マツオって言ったっけ？　アンタ、モグリのハンターだろ？」
マツオくんの挙動がおかしくなり、キョドキョドと視線が踊る。
「何の事で御座るか……？」
「モグリのハンターって何です？」
俺の質問に、ヴィータが答えてくれた。
「獣人って町に住んでいないから～、税金を納めていないでしょ？」
「あけみちゃんの時は、俺が納めたっすね」
あけみちゃんとは、俺が森で保護した猫獣人の悪女、いや可愛らしい女の子の事だ。
「あけみちゃんくらい小さかったら、まだ払えるけど～」
ヴィータがチラリとマツオを見やる。
「成人してから町に入る獣人は、新人ハンターにくっついて～、上がりを折半してお金を稼いだり～、獲った獲物を新人ハンターに売り付けてお金を稼いだり～。そのせいで実力の伴わないハンターが出たりして、ランク詐欺でハントパーティが壊滅して被害が出たりして～」

ふと思い立ったので聞いてみる。
「そういえば俺の場合は税金ってどうなったんでしょ？」
「ダンナは記憶障害があったから、特例だな。うちの親父が身元引き受け人になったしな」
アサカーさんにお礼を言っておこう。
「とにかく、税金を納めないとハンターライセンスももらえないから、大方ヒョロくて新人丸出しで、世間知らずっぽい、騙されやすそうなハンターを薬草採取場とかで物色してたんでしょ？」
「マツオくんはそんな悪い人じゃ……」
デックスの言葉を聞いてマツオくんに視線を移すと、地べたに倒れ込み痙攣を起こしていた。
「わかりやすっ！」
「とにかくね、イント。その犬を捨てて来るまでお家には入れません。今夜はイントの大好物の味噌煮込みうどんだけど、犬を捨てて来るまでお預けよ」
「さ、行きますよマツオくん」
「主殿……嫌で御座る！　嫌で御座る！」
地べたに寝転がりながら、駄々を捏ねるマツオくん。
「おい、イヌ男、うちのダンナはこう見えてランクBだぜ。モグリ行為は難しいと思うぞ」
エステアさん……名前を間違えてます。
「真で御座るか？」

若干青ざめてこちらを見るマツオくん。
「まあ、一応……」
ハンターライセンスを見せると、マツオくんはガックリと肩を落とした。
「それとね」
デックスが振り向き様にククリナイフを投擲する。マツオくんの頬を掠めて壁に突き刺さるククリナイフが「ビーン」と音を立てた。
「ここにいる四人全員Bランクだから、舐めた真似すると生き埋めにするわよ」
マツオくんはコクコクと頷くと、俺と一緒に家を後にした。
「あのーマツオくん？　元気出して、今日は運がなかったと思って、ね？」
「主殿は優しいで御座るな」
垂れ下がった耳が哀愁を誘う。
「とりあえず、仕事を探しませんか？　モグリのハンターをやるよりも、ずっと安定していると思いますよ」
「仕事を得るには町の人間の証明がいるで御座るよ」
「税収関連は騎士団管轄ですよね……知り合いに騎士団に詳しい人がいるので、聞きに行ってみましょうか」
「かたじけないで御座る」

落ち込むマツオくんを率いて、孫の湯の受付を訪ねると、目当ての人物が丁度通りかかるところだった。
「団長さん？」
「おお、イントくんか」
元団長のアーノルドさんは騎士団を辞めた後、エリーさんと夫婦になり孫の湯の便所の妖精になった……とは聞いていたが、彼の出で立ちはまさに妖精そのものだった。
限界まで鍛えられた筋肉と、額から顎にかけてザックリと刻まれた刀傷。
その刀傷はまるで雑巾でも縫い合わせたかのように乱雑に縫合され、異彩を放っている。
刀傷に伴い視力を失くした右眼は、ピンク色のハート形のアイパッチで覆われており、見事な体躯は、クマさんを模したアップリケを縫い付けられたエプロンに包まれていた。
「子供達が作ってくれたのだ、よく似合うだろう？」
「ええ……はい……」
その時元団長さんの背後から、稀代の悪女あけみちゃんが忍び寄り、元団長のエプロンを引っ張って、
「だんちょー、みんなでだんちょーの為に作ったの」
とプレゼントを渡した。
「はい、ねこみみ！　あけみとおそろいだね？　だんちょー」

元団長は震える手で猫耳カチューシャを受け取り、そのまま頭に装着した。
「似合うか？　イントくん」
こちらを振り向く元団長の表情は、憤怒の形相に見えるが、きっと笑っているのだろう……。
「ええ……とてもお似合いです」
「だんちょー、またプレゼント作ってくるね」
そう言うとあけみちゃんは廊下を駆け出した。
あれはわかっててやってますね……。
「それで本日は御相談があって伺ったのですが」
「む？　相談？」
猫耳元団長はこちらに向き直り、姿勢を正した。

◇◇◇

「ふうむ……」
ザリザリと顎を摩りながら眉間に皺を寄せて考え込む元団長アーノルドさんは、ギロリとこちらを睨み口を開いた。
「イヌ男くんと言ったかな？　君は町の人間になりたいらしいが、その理由を聞かせてもらって構

わないか？」
「マツオで御座る。獣人の里での暮らしは厳しくとも楽しいものでありましたが、町に馴染んだ獣人達からは、里では聞いた事もないような話をたくさん聞けました。拙者、成人するまで里だけがこの世界の全てだと思っていたで御座るが、もっと広い世界を見聞したいと毎日夢見るようになったで御座る。群(むれ)を守って家族だけに全てを費やすのも獣人の性(さが)であれば、広い世界に飛び出して一人広野に夢を見るのも獣人の性。気づいたら里を飛び出していたで御座る」
「ふうむ、だが里と比べて町の生活は良いところもあれば、悪いところもある。現に町の生活に馴染めず、里に帰りたいと酒場で泣いている獣人をよく見るが、覚悟は決まっているのか？」
「里を出るまでに散々悩んできたで御座るよ」
「そうか……町では群ではなく個人が評価される。助けを求めても救いの手を差し伸べてもらえるのは頑張った者だけだ。その評価を下すのは、自分ではなく他人だ。他ならぬイントくんが連れて来た者なので、俺も君を信じよう。ギルドに行って仮住民登録の申請をして、推薦人(すいせんにん)としてイントくんと俺の名前を連名で書き込むといい」
アーノルドさんはニヤリと笑いマツオの肩を軽く叩いた。
「悩み事や相談事があればまた訪ねて来なさい。若者の冒険心は嫌いじゃない、頑張れよイヌ男くん」
「マツオで御座る。かたじけない、アーノルド殿」

人生の荒波を乗り切った男の笑顔がやけに眩しく感じた。
猫耳カチューシャがなければ泣いていたかもしれない。
「うむ、俺も騎士団を辞めて孫の湯という組織に入りたての新人だ。お互い新人同士頑張って行こうじゃないか」
「新人って言っても元団長さんなら、持ち前のリーダーシップで孫の湯でも手腕を発揮できますよ」
アーノルドさんはいささか肩を竦めてキョロキョロと辺りを見回す。
「孫の湯には鬼が出るんだ」
声を潜めてアーノルドさんが呟いた。
「鬼ですか？　魔物は出ないと思うんですが……」
「アーノルド！　大浴場の掃除がまだ終わってないよ！　何やってんだい！」
鬼が出た。
「そんな事だから子供達のおもちゃになるんだよ！　さっさと仕事を終わらせな」
「了解しました！　現時刻を以て大浴場清掃任務に向かいます！」
アーノルドさんは脇目も振らずに駆け出した。
幸せそうで何よりです……。
「さあ、とばっちりを受ける前に、ギルドに行きましょう」

俺はマツオくんを連れ出して孫の湯を後にした。

◇◇◇

さて、ギルドに到着して受付に向かうところで悩んだのは、どの受付に行くかである。とはいえ、さすがに新人受付嬢には相談しにくいので、断腸の思いでナナさんのところへ向かった。
「ナナさん……度重なる昇進おめでとう御座います」
「ありがとう……」
「まさに飛ぶ鳥を落とす勢いで……」
「私以外全員新人だから、飛んでいる鳥ももういないけどね……」
「……」
「次はいつ？」
「は？」
「合コンよ」
「まだ決めてませんけど、参加希望ですか？」
「会場に火を放つから場所を教えて」
「……」

コツコツと机を指で叩き、見るからに苛立っているナナさんは、獰猛な肉食獣の笑みを浮かべてさらに食い下がる。
「いつなの？」
イヌ男くんは既に床の上に寝そべり、お腹を見せて服従のポーズになっていた。
「次は……ナナさんが主役で開催を……」
「聞こえない……」
「次の合コンは……ナナさんナイトを開催予定です……」
「うふふふ……」
「ナナさん？」
「うはははは！　私の時代がやっと巡ってきたのね？　そうなのね？」
カウンターの上に立ち上がり高笑いをするナナさん、それを見てドン引きする満員のハンター達と受付嬢。
この時俺はまだ、悪魔との契約書にサインをしたとは思ってもいなかった。
「それで？　今日はどうしたの？　隣の影の薄い人がどうかしたの？」
テンションが上がったナナさんが、初対面のマツオくんに酷い事を言う。
「仮住民登録の申請に伺ったんですが、ナナさんならわかるかと思いまして」
「ああ……なるほどね、その申請なら私ぐらいしか対応できないわね」

ナナさんはカウンター奥の書類棚から、申請用紙らしき物を数枚取り出し説明を始めた。
「まずこれが申請用紙ね。これに名前を書いて」
「住居がないのですが……」
「住所はいらないわ、名前を書いて。ここの欄にイヌ男と書けばいいわよ」
「マツオで御座る」
「そしてこっちが保証人記入欄よ。二人必要だけど、ハンターBランク以上と騎士団関係者ね、用意できる？」
「俺でいいですか？」
「いいわよ。肝心なのは騎士団関係者だけど……」
「アーノルドさんが連名で名前を書けと言ってましたが、騎士団を退団した彼でも関係者になるんですか？」
「元団長？　それなら申し分ないわね。アーノルドさんは予備騎士団員だから関係者よ」
「予備騎士団員？　てなんですか？」
「騎士団を退団した後も、有事の際に駆け付けるのが退役騎士団員ね、一年に二回の訓練義務を果たし、元騎士団幹部候補生以上の階級を持った人達を予備騎士団員って言うのよ。一年に二回の訓練で破格の日当をもらえる代わりに、予備騎士投入要請があった場合は即座に駆け付ける義務があるの」
「大変なのか余裕なのかわからない制度ですね」

「平和なうちは余裕よね」
申請用紙に俺の名前とアーノルドさんの名前を記入する。
「本当は本人が記入する物なんだからね？　まったく、みんな面倒くさがりなんだから！」
「ナナさんが合コンにエリーさんをねじ込むから、アーノルドさんが忙しくなったんですよ」
「そうよね～……独身女性最後の牙城が崩れたのよね……エリーさんがいるから大丈夫とか考えていた私が馬鹿だったわ～」
あ……変なスイッチを押しちゃった。
「えーと……イヌ男くん書けたっすか？」
「マツオで御座る、書けました」
意外と達筆な文字で記入された書類をナナさんに差し出す。
「仮住民登録ってそもそも何ですか？」
「わからないで申請に来たの？　確かに滅多に申請される事のない書類だけどね……」
ナナさんが背筋を伸ばし「コホン」と咳払いした後に説明を始めた。
「仮住民登録ってのは、人族以外の民族を国の庇護下に置く事を目的としたシステムでね。そもそも基本的に国のサービスってのは、納税者にしか与えられないサービスなのよ。その一方で納税者の獲得も必要でね。国ができた当初は税収を増やす事が急務で、手当たり次第に国民を増やして行ったのよ。その一環として、国のサービスを受けるメリットを、身を以て体験してもらうお試し

期間を設けたのが仮住民登録ね。その代わり、犯罪者や別の国の密偵を牽制する為に、行動の制限もあるわ」
「行動の制限ですか？」
「まず、当該地域の行政機関が指定する場所での寝泊まりね」
「住む場所を指定されるんですか？」
「公営住宅を格安で提供されるわ」
「なるほど」
「それから、騎士団もしくはハンターギルドでの就業と単独行動の禁止」
「単独行動禁止なんですか？」
「仕事中の話だけどね。簡単に言うと住居は格安で貸し出しますよ、その代わり仕事に行くならパートナーを見つけてくださいね、って事よ。それから最後に、年齢問わず十五年分の税金を、ローンで良いから支払う必要があるわ」
「イヌ男くん何歳でしたっけ？」
「マツオは二十歳になりました」
格安公営住宅入居と、五年分の税金免除と、過去の税金をローンで支払いできるって事は……。
「凄いお得じゃないですか！」
「あまり知られてない制度だけどね」

「これで拙者もバリバリ働けるで御座るな？　寝食を惜しんで働きたいで御座る！」
マツオくんは尻尾をブンブン振りながら、目を輝かせた。
「それでパートナーはイントくんでいいのね？」
「お、俺ですか？　……拙者は働きたくないで御座る……」
今回一番の難関が立ちはだかった。
「それにうちの奥様達が許す訳ないじゃないっすか」
ナナさんは苦笑いでマツオくんは身震いしている。
「なんかこう、ヘビーローテーションで仕事をしていて、真面目で、向上心にあふれていて、騙されやすい人に心当たりありませんか？」
「わかってて言ってるようにしか聞こえないわね……」
「やっぱり一人しかいないっすか？」
「今訓練場にいるから声かけてみたら？」
ナナさんはくいくいと親指を立てて訓練場を指差した。
「行きますよイヌ男くん」
「マツオで御座る」

◇◇◇

ギルドの訓練場にて、一人木剣を振るい、汗を流す女性がいた。
「どうもー……こんにちはー」
不意に声をかけられた彼女はこちらに振り向き、顔をこわばらせた。
「何の用だ？　またペテンにかけに来たのか？」
彼女……ワックちゃんはかなり警戒しているようだ。
「いえいえとんでもない、今日はワックさんに耳寄りな情報をお持ちしただけです」
ますます警戒したようで、その場から辞去しようと荷物をまとめ始める。
「とてもお得な情報ですよ？　今逃げ出すと後悔しちゃいますよ？」
「逃げる……だと？」
「まあまあ、お話だけでも聞いてくださいよ」
「ま、まあ話だけなら……」
そこでイヌ男くんの生い立ちと、今までの経緯を多少脚色しながら説明をした。
「要はモグリのハンターを、私に押し付けようって魂胆なのだな？」
「いえいえ、モグリじゃありませんよ。仮住民登録の手続きも終わってますので、立派なハンターです、ワックさんが認めてくれれば」
「また私をペテンにかけて、騙すつもりだな？」

「とんでもない。彼は誠実で真面目すぎるので、俺みたいないい加減で適当な人間では持て余すんですよ」
ワックちゃんの眉がピクリと跳ね上がった。
もう少しか……。
「そこでギルドでも真面目で、仕事熱心なワックさんに彼の先生になって欲しくてですね……」
「せ……先生だと……？」
ワックちゃんが目に見えて動揺しだした。
「はい、先生です。ぜひともワックさんに彼の手本になっていただきたく……そして可能であればパートナーに推薦したいのですが」
ワックちゃんは若干顔を赤らめながら、鼻の穴をぴくぴく膨らませてゴキゲンになって来た。
かかった……。
「いや、しかしだな、私には先生になるほどの実力は……」
「この通りで御座るワック先生」
イヌ男くんが土下座した。
ナイスアシスト！
「パートナーになるとしても、実力が伴わないとだな、その、どちらかが足手まといになっても、困るしな」

「マツオくんは機敏さを持ったアタッカーって感じですかね？」
「拙者はできれば、敵を引き付け攻撃を受けたりする、タンカーの役目が希望で御座る」
「おおお！　それならばワックさんの戦闘スタイルにぴったりじゃないですか」
「獣人特有の鼻と耳で索敵も得意で御座る」
「ますますワックさんのパートナーにぴったりですね」
イヌ男くんと調子を合わせていると、ワックちゃんも乗ってくる。
「うむ……まずは軽く手合わせをしてもよろしいか？　疑っている訳じゃないんだが、お互い足手まといになるのも嫌だしな？」
ちっ……疑り深くなっている。
ワックちゃんは壁際に乱雑に置かれている木剣を持ち出し、マツオくんにそれを放る。
「では、手合わせをお願いする」
お互いに向かい合い一礼をした後に、マツオくんとワックちゃんの手合わせが始まった。
「では……参る」
マツオくんがまず剣先を跳ね上げた。
跳ね上げた剣先をその場に残したまま、身体だけ一メートルほど踏み込んでいる。
剣先のみに視線を囚われていたら、瞬間移動でもしたかと思うだろう。
さらにタイミングを外した気合を掛ける。

「ちぇぇりゃあ」
気合の掛け方もタイミングを外せば見事なフェイントになるが、ワックちゃんとて伊達に一人黙々と剣を磨いてきた訳ではない。
真っ直ぐで素直な剣筋は、いくつものフェイントを織(お)り交ぜた初太刀にも拘(かかわ)らず、マツオくんの実の剣のみ払い落とす。
マツオくんがにやりと笑い、姿勢を正した。
小手先の剣筋では通じないと、早い段階で見切ったのだろう。
「おうらああ！」
ちょこちょこと素早い足捌(あしさば)きから、突然足を止めて剛の剣を繰り出す。
マツオくんの剣を柔らかくいなし、踊るように回転して胴を薙(な)ぐワックちゃん。
マツオくんは胴薙の剣をあえて身体で受ける。
タンカー希望のマツオくんなりの、デモンストレーションだろう。上半身裸の胸板にワックちゃんの木剣がめり込んだ。
「オゥフ」
あれ？
ワックちゃんが目を剥いて驚く。
「怪我は？」

「大丈夫で御座るよ、普段から鍛えておるゆえ」
マツオくんが何事もなかったかのように木剣を構える。
「ははっ、上等だ」
ワックちゃんの剣速が上がる。
マツオくんはワックちゃんの剣をいなし、躱(かわ)し、受け、時には投げや蹴りを織り交ぜて盾役を見事に務める。
最後にワックちゃんの剣を巻き取り、取り上げた。
「ここまでは真剣では不可能で御座るが……」
「いや、充分すぎるほどの腕前だ。モグリなどと馬鹿にして悪かった」
二人はがっしりと握手をした。
「で……いかがでしょ？　マツオくんの実力は？」
「私のパートナーには、もったいないと思うんだが」
ワックちゃんが頭を振る。
「いえいえ、俺が扱いに困っているのは、マツオくんの仕事熱心すぎるところなんですよ」
「な、何？」
「剣の腕より何より、仕事に対する姿勢の問題ですよねぇ」
「な、何てもったいない……」

ワックちゃんがワナワナしています。
「俺とマツオくんが組むと、色々と……」
「決めたぞ！　イヌ男と言ったな？　私と組んでくれ！」
ワックちゃんが姿勢を正し、ぺこりと頭を下げた。
「ワック殿、頭を上げてくだされ。拙者はハンター駆け出しで御座る。そして町にも馴染んでおらぬゆえ、何かと面倒をおかけすると思いますが、貴女の真っ直ぐな剣筋に惚れました。ぜひ拙者の姫様になって欲しいで御座る」
「ひ……ひめ？」
「あ～えーと……後の手続きはナナ部長にお願い致しますね、ワックさん」
「お、おい待て、ちょっと待て！」
マツオくんはワックちゃんの足元に跪き、頭を下げていた。

その後ナナさんのところに行って報告を済ませると、ナナさんが逆上する。
「ワックちゃんにまで男ができるなんてええ！」
「いやいや、パートナーですよ、パートナー」
手が付けられない。
訓練場から戻って来たワックちゃんは、ナナさんが騒ぐせいで注目の的になった。

「き、貴様という奴は……」
俺を睨むワックちゃん。
「いやいやいや、俺じゃないですよ、部長さんですよ！」
「部長言うなや！」
「ま、まあ良い。ナナさん、パートナー登録をお願いします」
「はいはい。ワックちゃん、この後イヌ男くんを公営住宅まで案内してもらっていい？」
「な、なんで私が」
「パートナーでしょ？　少しでも助け合ってお互いの呼吸を合わすのが、大事なんじゃない？」
「ぐ……」
「姫、ここは拙者一人で大丈夫で御座るよ」
「だから姫は……」

「姫……」「ひめ？」「ひめらしいぞ？」「姫か」

ギルド中の注目を再び集める。
ナナさんの噛み締めた下唇から血が滴っている。
「ぐぬぬ……書類は終わったな？　行くぞ！　イヌ男！」

「ははっ、姫」
ずんずんと足音を立てて、ギルドを出て行くワックちゃん、ハンカチを噛み締めて悔しがるナナさん。
「なんかあとは周りが勝手にくっつけちゃいそうですねぇ、今回は俺は関係ないですよ」
「イントくん、最近お見合いおばさんみたいになってるわよ」
「まあ、気になるところはありますけど、丸く収まればいいじゃないですか」
その時の俺はもう、味噌煮込みうどんしか頭になかったので、急いで家に帰ってしまった。

◇◇◇

数日後。
ギルドに薬草の納品に行くと、珍しくワックちゃんに話しかけられた。
「あ～その、今いいか？」
ワックちゃんは未だに俺に対して苦手意識があるらしく、話し掛けにくそうにこちらにやって来た。
「ええ、平気ですよ。何かありました？　イヌ男くんの事ですか？」

立ち読みサンプル
はここまで

「う、うむ。そうなんだが……」
なんか言いづらそうだ。
「何か粗相をしたとかですか？」
「いや、彼はとても仕事熱心で、真面目で、至って紳士的だ。ただ……」
「ただ？」
「イヌ男は防具をつけたがらないから、いつか大怪我をしそうで心配なのだ。訓練場での稽古でも、意図して攻撃を受ける節がある」
野生で生きて来たイヌ男くんだから、身を守る防具は嫌なんですかねぇ？
「私は心配なのだ。いつか取り返しの付かない事態になるのではないかと」
「なるほど、防具っぽくない鎖帷子とかはどうです？」
「重くて足運びが阻害されるらしいのだ」
オリハルコンシリーズは、うちの奥様達以外に使うと騒ぎになるとアサカーさんに釘を刺されているし……。
「生地の厚いジャケットとかはどうです？」
「暑苦しいらしくて嫌がるのだ」
ううむ……。
「とりあえず、最近の獲物って何を狩ってますか？」